飯田蛇笏「折りとりて」ほか句稿
飯田蛇笏「心像」原稿
飯田蛇笏「心像」原稿〈複製〉
飯田蛇笏『霊芝』1937（昭和12）年6月　改造社
飯田蛇笏『山響集』1940（昭和15）年10月　河出書房
飯田蛇笏『白嶽』1943（昭和18）年2月　起山房
飯田蛇笏『心像』1947（昭和22）年11月　靖文社
飯田蛇笏『春蘭』1947（昭和22）年7月　改造社
飯田蛇笏『穢土寂光』1936（昭和11）年12月　野田書房
飯田蛇笏『雪峡』1951（昭和26）年12月　創元社
飯田蛇笏『北方羈旅の諷詠』1951（昭和26）年3月　花樺会
飯田蛇笏「雪峡」原稿
飯田蛇笏「雪峡」原稿〈複製〉
「雲母」復刊号 1946（昭和21）年3月
写真パネル　飯田龍太撮影　炉辺の蛇笏　1956（昭和31）年1月撮影
飯田蛇笏「おく霜を照る日静かに忘れけり」軸装〈複製・原本 個人蔵〉
飯田蛇笏「御魂祭折から月の上るなり」短冊〈複製　原本 個人蔵〉
写真パネル　1958（昭和33）年4月8日、門前を歩く蛇笏と龍太・小林富司夫　撮影 若林賢明
飯田蛇笏「わが山河」句稿
飯田蛇笏『家郷の霧』1956（昭和31）年11月　角川書店
「雲母」1962（昭和37）年10月　蛇笏遺句「山月」掲載
「雲母」1962（昭和37）年11月号　龍太「山廬永別」掲載
「雲母」飯田蛇笏特集号　1963（昭和38）年3・4月
飯田蛇笏『椿花集』1966（昭和41）年5月　角川書店
高浜虚子「山廬」扁額
落款印・印譜

高浜虚子『進むべき俳句の道』1918（大正7）年7月　実業之日本社
前田普羅「色かへて夕となりぬ冬の山」短冊〈複製〉
前田普羅「荒梅雨や山家の煙這ひまはる」短冊
村上鬼城「花ちるや耳ふつて馬のおとなしき」色紙
原石鼎「炉ひらいて人をたゝへん心哉」短冊
原石鼎「蓼の穂に冬野の神は立つらしも」短冊
渡辺水巴「秋風やつくゑの上の小人形」短冊
渡辺水巴「土雛はむかし流人や作りけん」色紙

西島麥南「茸きあまる色濃き菖蒲一束ね」短冊
西島麥南「堆の霜櫨はもみぢを尽くしけり」短冊
石原舟月「鴫街に舞ひて四温の水ながる」短冊
石原舟月「大沼に雲霧こめて猟期きぬ」短冊
宮武寒々「断崖層秋燕日々に能登老ゆる」短冊
宮武寒々「彼岸西風炎の如く塔登る」短冊
中川宋淵「み霊今秋の山河のいたるところ」短冊
中川宋淵「梅の実の子と霞の子と生れ合う」短冊
中川宋淵「年木樵ぬかるみを踏み雲をふみ」短冊
松村蒼石「たわたわとうすら氷に乗る鴨の脚」 短冊
松村蒼石「郭公やわが詩つひにひそかなる」短冊
松村蒼石「枯々てやすらぎの葦芽くむなり」短冊
高室呉龍「石垣のきわの落葉に火をつける」短冊
高室呉龍「竹藪のすこしそよけど夏霞」短冊
高室呉龍「初蝶やたかゝらねどもひるかへる」短冊

高橋淡路女「蛍火をとりおとしたる青さかな」短冊
高橋淡路女「羽織きて二十三夜の女かな」短冊
柴田白葉女「林泉に日輪映り黒鳳蝶」短冊
柴田白葉女「山の雨やみ冬椿濃かりけり」短冊
柴田白葉女「水鳥のしづかに己が身を流す」色紙

【飯田龍太】

飯田龍太「雪の峰しづかに春ののぼりゆく」軸装
飯田龍太「あるときはおたまじゃくしが雲の中」軸装
飯田龍太「遠くまで諸葉のそよぐ夏景色」軸装
飯田龍太「山々のはればれねむる深雪かな」軸装
飯田龍太「雪の日暮れはいくたびも読む文のごとし」軸装
飯田龍太「山寒し年改むる三日前」短冊
飯田龍太「紺絣春月おもく出でしかな」短冊
飯田龍太「あつき湯に水さす春の夕餉どき」色紙
飯田龍太「山起伏して乱れなき大暑かな」色紙
飯田龍太「わが息のわが身に通ひ渡鳥」色紙
飯田龍太「鰯雲日かげは水の音迅く」色紙
飯田龍太「冬の海てらりと遊ぶ死も逃げて」色紙
飯田龍太「ふるさとの楢山夢の粉雪舞ひ」色紙
飯田龍太「後山の記」原稿
飯田龍太　自句自解「老騎手は出湯に沈み春の雲」原稿
飯田龍太　自句自解「走者一掃して冬の山冬の川」原稿「NHK学園　俳句」掲載
飯田龍太　自句自解「年暮るる庭師焚火の輪を解けば」原稿「NHK学園　俳句」掲載
飯田龍太　自句自解「雪やみしばかりの京の日暮れつつ」原稿「NHK学園　俳句」掲載
井伏鱒二「蛇笏碑のこと」原稿
飯田龍太「中村汀女の句」原稿
飯田龍太「『未明音』の節度」原稿
飯田龍太「季語について」原稿
飯田龍太「森澄雄の風姿ー帰って来た顔ー」原稿
飯田龍太「俳句の魅力」原稿
飯田龍太「俳句の楽しみ」原稿
飯田龍太「卒爾」句稿
飯田龍太「夕焼けて夏山おのが場にそびゆ」色紙
飯田龍太「山の木」草稿
飯田龍太「紺絣春月おもく出でしかな」軸装
飯田龍太「去るものは去りまた充ちて秋の空」軸装
飯田龍太「露深し不意にめでたき空のいろ」色紙
飯田龍太「なにはともあれ山に雨山は春」扇面〈複製〉額装
飯田龍太　貼り交ぜ屏風〈複製〉
飯田龍太「天地戯遊」句稿
写真パネル　甲府中学5年　1937（昭和12）年、1938年頃
写真パネル　百戸の谿口絵写真
朝井閑右衛門「蛇笏・達治・龍太」像
「雲母」1951（昭和26）年6月「紺絣」巻頭号
「雲母」1959（昭和34）年1月号　500号記念号
飯田龍太『百戸の谿』1954（昭和29）年8月　書林新甲鳥
飯田龍太『童眸』1959（昭和34）年3月　角川書店
飯田龍太『麓の人』1965（昭和40）年11月　雲母社　雲母叢書第29篇
飯田龍太『忘音』1968（昭和43）年11月　牧羊社　「現代俳句十五人集」第1巻・月報
飯田龍太「一月の川一月の谷の中」軸装〈複製〉

「俳句」1969（昭和44）年2月号
飯田龍太『春の道』1971（昭和46）年10月　牧羊社
愛用の釣り竿
写真パネル　山廬庭前にて　撮影 斉藤勝久　提供 角川学芸出版
写真パネル　山廬裏手の竹林にて　撮影 若林賢明
飯田龍太『山の木』1975（昭和50）年4月30日　立風書房
飯田龍太『涼夜』1977（昭和52）年9月　五月書房和装本シリーズの1巻、限定400部
飯田龍太『今昔』1981（昭和56）年11月　立風書房
飯田龍太『山の影』1985（昭和60）年7月　立風書房
飯田龍太『遅速』1991（平成3）年12月　立風書房
飯田龍太「『雲母』の終刊について」原稿（写し）
「雲母」終刊号　1992（平成4）年8月
飯田龍太『紺の記憶』1994（平成6）年7月20日　角川書店
飯田龍太『遠い日のこと』1997（平成9）年6月20日　角川書店
落款印
印譜
愛用カメラ　二眼レフ（革カバー）
写真パネル　村の女性・村の農家・村の風景・狐川畔　撮影 飯田龍太
写真パネル　狐川上流　撮影 飯田龍太

第5室　山梨出身・ゆかりの作家

前期展示　4月1日（火）～8月24日（日）

【ジャーナリズム】

徳富蘇峰

徳富蘇峰『烟霞勝遊記』上・下　1924（大正13）年　民友社
徳富蘇峰「推倒一世王智勇開拓萬古之心胸」軸装
藤谷みさを『蘇峰先生の人間像』1958（昭和33）年1月　明玄書房

池辺三山

池辺三山「新聞記者の地位」「山梨日日新聞」1888（明治21）年1月12日　パネル

川合信水

「女学雑誌」第338号　1893（明治26）年2月「雑録」パネル
大塚榮三『郡是（ぐんぜ）の川合信水先生』1931（昭和6）年12月　岩波書店

石橋湛山

『石橋湛山写真譜』1973（昭和48）年3月　東洋経済新報社

廣瀬千香

廣瀬千香『山中共古ノート』第1～3集　1973（昭和48）年6月～1975（昭和50）年6月
廣瀬千香『思ひ出雑多帖』1990（平成2）年7月　日本古書通信社
矢崎千代二 画「望月百合子肖像」
「女人芸術」大阪宣伝旅行　1928（昭和3）年　パネル

川合　仁

川合仁『私の知っている人達』1970（昭和45）年10月　藤書房
川合澄男『回想・川合仁』1975（昭和50）年4月　川合仁刊行会

望月百合子

矢崎千代二 画「望月百合子肖像」
写真パネル「女人芸術」大阪宣伝旅行　1928（昭和3）年
望月百合子『大陸に生きる』1941（昭和16）年5月　大和書店
望月百合子『限りない自由を生きて』1988（昭和63）年3月　ドメス出版

雨宮庸蔵

永井荷風 筆・画「昼間から錠さす門の落葉かな」色紙
雨宮庸蔵『偲ぶ草』1988（昭和63）年11月　中央公論社

竹中　労

竹中労ほか「夢よ少年懐古浅草の灯よチャンバラ時よ」色紙
竹中労『無頼と荊冠』1973（昭和48）年9月　三笠書房
竹中労『ザ・ビートルズレポート』1982（昭和57）年6月　白夜叢書
竹中労『鞍馬天狗のおじさんは』1992（平成4）年8月　ちくま文庫

【小説・評論・随筆・翻訳ほか】

相田隆太郎

相田隆太郎『テクノクラシイ』1933（昭和8）年4月　新潮社
相田隆太郎『農民文学の諸問題』1949（昭和24）年4月　甲陽書房
相田隆太郎「川中島」草稿

和田芳恵

和田芳恵「灯」草稿
和田芳恵『接木の台』1974（昭和49）年9月　河出書房新社

山田多賀市

写真パネル　45歳の時の山田多賀市
山田多賀市『耕土』1940（昭和15）年3月　大観堂書店
「農民文学」創刊号　1951（昭和26）年9月　農民文化協会

新田次郎

新田次郎「富士を守れ」原稿〈複製〉
写真パネル　新田次郎と上野晴信（歴史家　山梨県生まれ）
新田次郎『強力伝』1956（昭和31）年2月再版　朋文堂
新田次郎『芙蓉の人』1971（昭和46）年5月　文藝春秋

石原文雄

のむら清六画　石原文雄肖像
「中部文学」創刊号　1940（昭和15）年4月
石原文雄『断崖の村』1946（昭和21）年7月　高須書房

藤巻宜城

「あぢさゐ」5月号　1922（大正11）年5月
「映象」第１輯　1925（大正14）年4月
「中央線」創刊号　1968（昭和43）年3月

中村鬼十郎

中村鬼十郎『傾斜地の村』1943（昭和18）年9月　アジア青年社
中村鬼十郎「慟哭の川」草稿
中村鬼十郎『慟哭の川』1976（昭和51）年10月　甲陽書房

熊王徳平

熊王徳平「山の端を月上るなりきりぎりす」色紙
熊王徳平『いろは歌留多』1942（昭和17）年2月　第一芸文社
熊王徳平『甲州商人』1958（昭和33）年9月　五月書房

加賀美　実

加賀美実『恥辱の時代』1974（昭和49）年4月　文化総合出版
加賀美実『畦』1984（昭和59）年4月　文化総合出版

小林　実

小林実「皇居外苑」原稿
小林実『新墾地』1935（昭和10）年２月　吐風書房
小林実『開拓際』康徳９年４月30日　満洲事情案内所
小林実『白い太陽』第一部・第二部　1961（昭和36）年3月　東京信友社

鳴山草平

写真パネル　鳴山草平「甲府市の自宅で」1937（昭和12）年春
鳴山草平「カミナリ（先生）青春帖　第六話―緑の吹く風の章」草稿
鳴山草平『カミナリ先生青春帖』1960（昭和35）年1月　同人社

羽中田　誠

野間仁根『酔いどれ記者』挿絵原画
羽中田誠『酔いどれ記者』1953（昭和28）年12月　鱒書房
羽中田誠『墓碑銘』1973（昭和48）年2月　東邦出版社

保坂義照

保坂義照『武田二十四将論』1944（昭和19）年2月　アジア青年社
保坂義照『愁風天目山』1952（昭和27）年9月　農村文化協会

小川正子

小川正子『小島の春』1939（昭和14）年4月改版　長崎書店

金子文子

金子文子『何が私をかうさせたか』1931（昭和6）年7月　春秋社
『金子文子歌集』1976（昭和51）年3月　黒色戦線社
『金子ふみ子　全歌集　獄窓に想ふ』1987（昭和62）年12月　黒色戦線社

大町桂月

大町桂月「ふもとよりいたゝきまでも富士の根を背負ひてのぼる八ヶ嶽かな」扇面
大町桂月「夜をこめて落葉に雨のかゝりけり」短冊

野尻抱影

野尻抱影　小尾孝平宛葉書　1910（明治43）年5月19日〈複製〉
山口誓子・野尻抱影『星恋』1946（昭和21）年6月　鎌倉書房

平賀文男

平賀文男『日本南アルプス』1929（昭和4）年6月　博文館
「山と溪谷」第168号　1953（昭和28）年6月　山と溪谷社

寺田重雄

寺田重雄『甲州魚風土記』1980（昭和55）年12月　芸文社
「鵺　nue」終刊号（寺田重雄追悼号）1995（平成7）年10月

芦澤一洋

写真パネル　芦澤一洋　アメリカアイダホ州のヘンリーズフォークで
芦澤一洋『アーヴィングを読んだ日』1994（平成6）年11月　小沢書店
芦澤一洋『バックパッキング入門』1976（昭和51）年月　山と渓谷社
芦澤一洋『フライフィッシング全書』1983（昭和58）年　森林書房
芦澤一洋『アウトドア・ものローグ』1985（昭和60）年8月　森林書房

山中共古

山中共古『甲斐の落葉』1926（大正15）年11月　郷土研究社

土橋里木

土橋里木『山梨県の民話と伝説』1979（昭和54）年7月　有峰書店
土橋里木『山村夜譚』1993（平成5）年6月　近代文芸社

大森義憲

大森義憲『甲州年中行事』1952（昭和27）年11月　山梨民俗の会
写真パネル　折口信夫と大森義憲

中沢　厚

中沢厚『山梨県の道祖神』1973（昭和48）年5月　有峰書店
中沢厚『つぶて』1981（昭和56）年12月　法政大学出版局

浅川伯教

「白磁」創刊号　1922（大正11）年4月
浅川伯教『釜山窯と対州釜』1930（昭和5）年7月　彩壺会

浅川　巧

浅川巧『朝鮮の膳』1929（昭和4）年3月　工政会出版部

永峯秀樹

永峯秀樹『暴夜物語』第1編・第2編　1875（明治8）年2月、5月　山城屋

矢崎源九郎

矢崎源九郎訳『アンデルセン童話名作集』1955（昭和30）年3月　筑摩書房
矢崎源九郎『これからの日本語』1960（昭和35）年2月　三笠書房

【童話・童謡】

大村主計

大村主計「花かげ」色紙
大村主計『ばあやのお里』1932（昭和7）年1月　児童芸術社
大村主計　童謡集『麥笛』1932（昭和7）年9月　児童芸術社
「楽しい童謡集」レコード盤　1959（昭和34）年　コロムビアレコード
大村主計『花かげ』1981（昭和56）年10月

米山愛紫

「チチノキ」第18冊　1935（昭和10）年3月
米山愛紫『春の停車場』1942（昭和17）年6月　文昭社
『米山愛紫歌謡集　武田節』1975（昭和50）年7月　甲府ライオンズクラブ

小野政方

小野政方『りんごののぞみ』1928（昭和3）年10月　研究社
小野政方『愛児読本』ひらかなの巻　1934（昭和9）年10月　厚生閣

太田黒克彦

太田黒克彦「マスの旅」原稿
太田黒克彦『マスの大旅行』1956（昭和31）年9月　大日本雄辨会講談社

山北しげり

山北しげり『小人の踊り』1936（昭和11）年11月　宏文堂書店
「シャボン玉」1937（昭和12）年2月

塩沢　清

塩沢清『ガキ大将行進曲』1977（昭和52）年4月　旺文社
塩沢清『ぼくもあの子も転校生』1987（昭和62）年8月　ポプラ社
塩沢清『もうひとりのわたしみつけた～理香とチエリの物語～』1992（平成4）年5月　ポプラ社

【戯曲・脚本】

小林一三

写真パネル　小林一三　宝塚歌劇40周年記念
小林一三『歌劇十曲』1917（大正6）年10月　玄文社
小林一三『曾根崎艶話』1948（昭和23）年10月　芙蓉書房

河野義博

中村吉蔵・河野義博『近代演劇史論』1921（大正10）年12月　日本評論社
「演劇」創刊号　1932（昭和7）年4月
写真パネル　河野義博作品の舞台写真

大木直太郎

「月水金」6　1937（昭和12）年1月
吉野源三郎 脚色　大木直太郎 脚色『君たちはどう生きるか』1978（昭和53）年5月9刷　未来社
『大木直太郎戯曲選集』1998（平成10）年5月　陽光台OAプラザ

菊島隆三

菊島隆三・黒沢明共同脚本「用心棒」第２稿台本
菊島隆三・黒沢明・小国英雄共同脚本「椿三十郎」台本（決定稿）

小柳津　浩

小柳津浩『学校演劇論』1953（昭和28）年11月　甲陽書房
小柳津浩『青年演劇脚本集』1958（昭和33）年7月　甲陽書房
『小柳津浩脚本集　二発の銃声』1986（昭和61）年9月　山梨舞台芸術センター

竹内勇太郎

竹内勇太郎「赤帽母ちゃん」原稿
「(仮題）赤帽かあちゃん」台本　女の劇場　制作　日本テレビ・歌舞伎座テレビ　原作・脚本　竹内勇太郎
出演 江利チエミ・清川虹子・亀石征一郎
竹内勇太郎『山本勘助』第1巻　1985（昭和60）年8月　学習研究社
山本有三作・竹内勇太郎脚本「真実一路」台本（第2稿）

後期展示　9月30日（火）～3月8日（日）

【詩】

青柳瑞穂

青柳瑞穂『睡眠』1931（昭和6）年1月　第一書房
青柳瑞穂「玉堂の花」原稿

尾崎喜八

尾崎喜八『山の絵本』1935（昭和10）年7月　朋文堂　表紙 片山敏彦
尾崎喜八「遠い日の山小屋」原稿〈複製〉

金子光晴

金子光晴「似顔絵の似たる日秋の足の冷」色紙
金子光晴『若葉のうた』1967（昭和42）年4月　勁草書房

杉原邦太郎

杉原邦太郎「昨日は靡（なび）く翠であった」色紙
「山脈」創刊号　1930（昭和5）年8月
杉原邦太郎『火山』1930（昭和5）年2月　機山閣書店

内田義廣

内田義廣『花の群落』1976（昭和51）年4月　日本未来派の会

上野頼三郎

上野頼三郎「犬のように」詩稿
上野頼三郎『村の生活』1930（昭和5）年10月　村落社

山口啓一

山口啓一『石炭と花』1930（昭和5）年5月　機山閣書店

中室員重

中室員重『兵隊詩集』1931（昭和6）年8月　海図社

米澤順子

米澤順子「額のある静物」油彩　昭和初期
米澤順子『聖水盤』1919（大正8）年11月　東京堂

米倉寿仁

米倉寿仁『透明ナ歳月』1937（昭和12）年4月　西東書林
「甲府派」創刊号　1954（昭和29）年11月

宮田栂夫

宮田栂夫「オパールの変転ルビーの紋章」色紙
宮田栂夫『仮面』1954（昭和29）年10月　甲府派発行所

曾根崎保太郎

曾根崎保太郎「酩酊が抱くフェニックスの卵黄」色紙
曾根崎保太郎『灰色の体質』1954（昭和29）年11月　甲府派発行所
「未踏」創刊号　1950（昭和25）年3月

野澤　一

野澤一「四十一歳三月三日夜作」未定稿
「童子行」1号　1937（昭和12）年5月

津嘉山一穂

津嘉山一穂「未刊詩集」草稿

鈴木久夫

鈴木久夫「断崖」原稿
鈴木久夫『断崖』1930（昭和5）年11月　民謡レビュー社

鈴木祐之

鈴木祐之「心の傾きに」原稿
鈴木祐之『わたしのヒロシマ』1969（昭和44）年3月　甲陽書房

小林冨司夫

小林冨司夫「地は落葉線路の枕木を一本一本渡ってゆくと満月がいたぼくは冬の満月をすぎた」色紙
小林冨司夫『きいろい炎』1949（昭和24）年5月　中部文学社

土橋治重

土橋治重「甲州は颯爽と山々が肌を脱いでいた夜は深々と星がかがやいた」色紙
土橋治重　詩集『花』1953（昭和28）年1月　日本未来派発行所
「風」129（終刊）号　土橋治重追悼号　1993（平成5）年12月

中込純次

中込純次「詩集母と恋人」原稿「山茶花」
中込純次『母と恋人』1929（昭和4）年1月　国風閣

一瀬　稔

一瀬稔 筆　のむら清六 画「裏山で」軸装
一瀬稔　詩集『山鶏』1940（昭和15）年10月　中部文学社

【短歌】

伊藤生更

伊藤生更「北の方より駒鳳凰農鳥と我が目を移す雪の高山」軸装
「美知思波」創刊号　1935（昭和10）年6月
伊藤生更『山雲』1953（昭和28）年10月　美知思波発行所

中村美穂

「アララギ」第18巻第５号　1925（大正14）年5月
中村美穂『佛顔』1931（昭和6）年9月　みづがき社

相澤貫一

相澤貫一『石水集』1971（昭和46）年6月　発行人　古谷幸江

若尾隣平

若尾隣平『若尾隣平遺稿集』1971（昭和46）年1月　発行人　若尾朗

中大路佳郷

中大路佳郷「われ生れし虎年なれば病める身に渇を入れつつ初陽あみをり」短冊
中大路佳郷『華葩』1987（昭和62）年2月　須曾乃短歌会

伊藤映二

伊藤映二「朝霧」原稿
伊藤映二「西行はどこら辺りで笠上げて見たであろうか赤い富士」色紙
伊藤映二『揺籃時代』1926（昭和2）年10月　上田書店

飯野真澄

飯野真澄「広き田の南寄りに黒牛は立ちて居るなり代掻を止めて」色紙
『飯野真澄歌集』1971（昭和46）年８月　白玉書房

青木辰雄

青木辰雄「六階の食堂にゐてややややに茜うするる時を過ごしぬ」短冊
『青木辰雄歌集』1988（昭和63）年8月

相澤　正

『相澤正歌集』1954（昭和29）年1月　白玉書房

許山茂隆

許山茂隆「病院に歌のメモ帖持ちゆけどけふも空白のまゝ持ちかへる」色紙
許山茂隆『郷園』1947（昭和22）年7月　国民文学社

鈴木　孝

鈴木孝「丘の上の枯桑原に鳴る風のいく日吹きなば春や来向かふ」軸装
「樹海」創刊号　1954（昭和29）年7月
鈴木孝『丘のある街』1966（昭和41）年10月　甲陽書房

佐野四郎

佐野四郎「地に生くるなべてをいたはる如くにもいわし雲しづかにそらおほひくる」軸装
佐野四郎『杉の花粉』1934（昭和9）年7月　朝日書房

渋谷　俊

渋谷俊『華鬘』1939（昭和14）年4月　柳正堂書店
与謝野晶子「序に代へて」歌稿（渋谷俊『華鬘』所収）
与謝野晶子　渋谷俊宛書簡　年不明9月1日

渋谷玻瑠子

渋谷玻瑠子『無礙の光』1929（昭和4）年12月　柳正堂書店

茂手木みさを

写真パネル　1933（昭和8）年、与謝野寛、晶子夫妻来県の折
茂手木みさを『一隅の薔薇』1930（昭和5）年4月　朝日書房

【俳句】

今村霞外

今村霞外「初汐にのりて美しすて扇」短冊
今村霞外『法燈』1954（昭和29）年8月　私家版

五味洒蝶

五味洒蝶「寒曝をみる人まれに石叩」短冊
五味洒蝶『洒蝶句集』1964（昭和39）年9月　雲母社

辻　蕗村

辻蕗村「冬の雲その白きゆえ弧なりけり」色紙
辻蕗村『樹影』1973（昭和48）年7月　雲母社

榎本虎山

榎本虎山「蛍ゐていのち静かに露を染む」短冊

角田雪弥

角田雪弥「竹の葉によすがのひかり冬の水」短冊
角田雪弥「月代の蛇籠をくぐる水の音」色紙
角田雪弥『畦火』1987（昭和62）年7月　竹頭書房

山田岫雲

山田岫雲「冬雲に親子遠しや山畑」一枚物
山田岫雲『朴の花』1975（昭和50）年11月　発行　山田武雄

柏木白雨

柏木白雨「新蕎麦会句会記」1942（昭和17）年8月22日
柏木白雨『白雨句集』1977（昭和52）年7月　若葉社

鈴木青処

鈴木青処「祖母のゐて紅梅莟む子の娶り」短冊
山口青邨選「稿本青処句集」

堤　俳一佳

堤俳一佳「電話より文に情あり後の月」短冊
堤俳一佳『俳一佳句集』1951（昭和26）年4月　裸子発行所

加賀美子麓

加賀美子麓「川千鳥月より鳴いて落ちにけり」色紙
加賀美子麓『火度』1987（昭和62）年8月　牧羊社

赤堀五百里

赤堀五百里「淵明も李白も来よや屠蘇酌まむ」短冊
赤堀五百里『萬里』1995（平成7）年5月　読売・日本テレビ文化センター

石原八束

石原八束「死は春の空の渚に遊ぶべし」色紙
石原八束「露の彩動き赤富士現しけり」色紙
石原八束『秋風琴』1955（昭和30）年8月　書肆ユリイカ　題簽 石原舟月

新免一五坊

新免一五坊「冬日とははうふつとしてある思ひ」短冊

【川柳】

篠原春雨

篠原春雨「三階の一間に小僧病んでゐる」色紙

中沢春雨

中沢春雨「団十郎日本一の目玉なり」短冊
『騒愁　中沢春雨川柳句集』1967（昭和42）年11月　甲陽書房

雨宮八重夫

雨宮八重夫「一本の道あり明日へひた行かな」色紙
雨宮八重夫『遍路美知』1977（昭和52）年9月　サンケイ新聞社

田中浮世亭

田中浮世亭「浮世亭句抄」

【漢詩】

香川香南

香川香南『香南晩稿』1934（昭和9）年12月

村松蘆洲

村松蘆洲「送兒定孝之瑞西」漢詩色紙
村松蘆洲『蘆洲詩集』1980（昭和55）年5月　発行人　村松定孝
写真パネル　蘆洲が創建に関わった山縣神社（甲斐市）

笠井南邨

笠井南邨 撰　土屋竹雨 評『翰墨縁』詩稿・印譜

⑵ 企　画　展

企画展「ベストセラー誕生！　『南総里見八犬伝』の世界」

期　間　令和７年９月13日（土）～11月24日（月・振替休）　63日間

会　場　展示室Ｃ

趣　旨　「南総里見八犬伝」は、江戸時代後期の戯作者、曲亭馬琴が、文化11年（1814）の刊行以降、足かけ29年をかけて完成させた全98巻106冊に及ぶ一大長編小説。刊行当時から読者の人気を集め、歌舞伎や錦絵の題材になり、様々なパロディ本などが刊行された。明治以降も、多くの小説家たちの関心を集め様々な言説を引き出し、「八犬伝」に着想を得た翻案・作品が生み出されている。現代に至っては、小説や舞台演劇だけでなく、映画やコミック、ゲームなどの題材としても取り上げらており、時代とジャンルを超えて愛され続けるベストセラーといえる。
本展では、「八犬伝」とはどんな物語か、いかに江戸時代の読者に愛されてきたか、刊行当時の魅力に迫るとともに、時代の流れとともに、ジャンルを超えて広がっていった様相に迫った。物語に登場する舞台の内、甲州も重要な場所として登場することにふれ、さらには、当時の江戸と甲州の文化の交流にもふれる機会とした。





